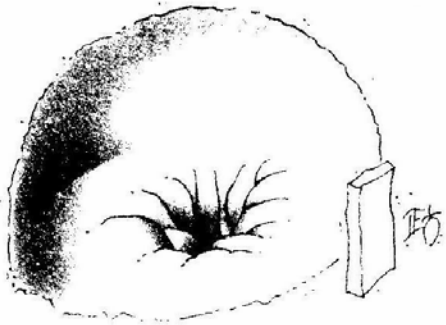


開いた墓

第2編第3章

人間の腐敗した本性から出るものはすべて罪とされるもの以外はない。



神を知らない人が善を行うことはできませんし、神を愛さない人は善を愛することができません。神を見出せない人は善を見出すことができません。神を知らないものは絶対に自分の力で善を行うことができません。どのような善も全く行うことができません。行えるとすればそれはただ神の特別な恵みによるものなのです。

墓の中にあるものは何か？冷たい死体、腐敗した物体、腐敗した悪臭、死体に群がる蛆虫、じめじめとした闇の世界、徹底した孤独、そこにはよいものはひとつも見出すことができません。あなたは罪の下にある人間を何にたとえますか？ある人は人間が罪の下にあることを認めますが、まだ自分である程度の善悪を判断して、善を行うことができると言っています。またある人は、人間は病んでいてもある程度の善を行うことのできる能力が残されているというのです。

さらにある人は、人間はたとえ罪を犯しても教育を受け、修養をつむなら成熟した人間となり、自分の力で高潔な人生を送ることが可能だと語ります。また人間こそ神であると言い出す人さえいるのです。そのように言う人は人間のするすべての行動はみなよいものだと主張するのです。これらは愚かな人間が語るたわごとにしかずぎません。なぜなら聖書は人間を開いた墓だと言っているからです。

第1節 人間の本性は完全に腐敗していて自分からは全く善を行うことができない。

一言で言って人間は墓でしかありません。その内側は腐敗と悪臭が満ちているのです。「肉から生まれたものは肉である」(ヨハネ 3:6)というイエスの御言葉がすべての人間全体に対しての説明であるとすれば、人間は全く憐れな被造物にすぎないこととなります。使徒パウロの証言でも「肉の思いは死であり、霊の思いは命と平和であります。なぜなら、

肉の思いに従う者は、神に敵対しており、神の律法に従っていないからです。従えないのです」(ローマ8:6,7)とされています。

ある人はここで言われている肉という言葉が人間の霊魂の中の感性の部分だけを指している、高尚な部分を指している言葉ではないと主張しています。そのような人は人間の一部分だけが墓になっていると言うのです。しかし、これは大変危険な見解であると言えます。聖書は明らかに肉と霊を互いに対立したものとして強調し、人には霊的なもの(聖霊に属するもの)はなく、すべてが肉体的なものだと言っているからです。ですから人は再び生まれ変わらなければその霊をもつことはできず、私たちは生まれたときからただ肉だけを持っているということになります。ですから新たに生まれなければ人はその全体が墓であると言えるのです。

特にローマ書3章10節以下はちょうど雷のように人間の本性がどんなに徹底して腐敗しているかをすべての人々に宣言しています(エレミヤ17:9「人の心は何にもまして、とらえ難く病んでいる」)。人間は深刻な病のために病院に入院しているような存在ではありません。すでに死んで墓に入っているのです。神に対してもそして善に対してもそうなのです。ところがこの点についてときどき混乱してしまう人がいます。なぜなら、この世では神を信じていなくても善を行い、徳を高めることに努力している人たちがいるからです。そのような人たちを見るとまだ人間の中にはわずかによき部分が残っているように思えるのです。

しかし、それは彼らのうちにある悪しき本性を抑制する神の恩寵の働きによるものなのです。ですから神が少しでもその手を彼らから離すならばその人たちも狂った獣たちのように悪に手を染め始めることになります。しかし、このように腐敗した人間の本性のうちに働かれる神の恩寵は悪しき本性を浄化するのではなく、抑制するに過ぎないのです。

もちろん、神に選ばれた者たちは新しく生まれ変わるといふ恩寵によってその本性を浄化され、善を行うようにされるのですが(ヘブル9:14「まして、永遠の“霊”によって、御自身を傷のないものとして神に献げられたキリストの血は、わたしたちの良心を死んだ業から清めて、生ける神を礼拝するようにさせないでしょうか」)、神に遺棄された者たちはこの世を保持するために必要な程度に、神の恩寵が与えられて彼らの悪しき本性が抑制されているのです。

第2節 神を知らない人々が尊敬される行いをするのは神の特別な恩寵による

聖徳太子は日本の歴史の中で多くの人々から尊敬を受ける人物だと言えるかもしれません。彼の優れた才能、そして日本を正しい国にしようと努力した功績は人々の尊敬を受けるにふさわしいものではないでしょうか?それならまことの神を知らない人々の内にも、徳を追及し、それを守ることができる力があると認めなければならないのでしょうか。たしかに、聖徳太子のように人々の尊敬を受けるにふさわしい人物はこの世にたくさん存在

します。しかしそのすべては神がこの世界を保持するため、また人類の福祉のために特別な恵みを与えられ、立てられた人物たちなのです。

神を知らない人は善を知りませんし、神を愛さない人は善を愛することはできません。また神を見出すことのできない人は善を見出すこともできないのです。神を知らない者たちは絶対に自分の力で善を行うことはできません。どのような善も行うことはできないのです。もし彼らが善を行えたとすればそれはただ神の特別な恩寵によっているのです。

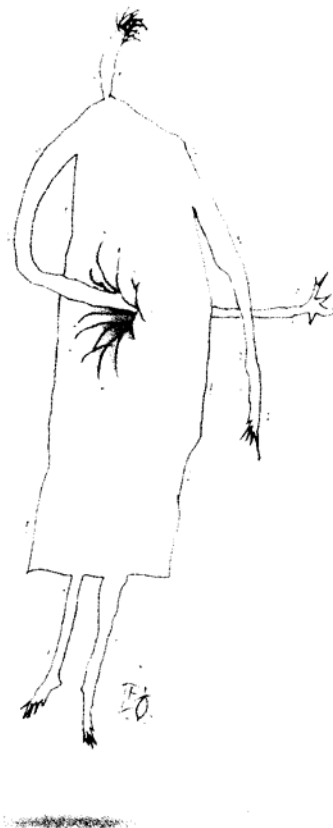
第3節 人は必然的に罪を犯すが、強制されてするのではない。

理性と意思が罪の鎖に繋がれてがんじがらめにされている人間は神の恩寵がなければ、いつでも必然的に罪を犯すようになっています。必然的という言葉と強制的という言葉は全く違った意味を持っています。墮落した人間が必然的に罪を犯すということは自らの切実な要求によって罪に向かい、罪を選び、そして行うのです。決して誰かに強制されて、しかたなしに罪を犯すのではないという意味が必然的という言葉の中に示されています。人間が罪のために失ってしまったのは意思ではなく、意思の健全さだと言えるのです。そこでベルナルドスという人は次のように語っています。「単純に決心するのは人がすることであり、悪を決心するのは腐敗した本性のなすわざである。そして善を決心するのは恩寵によるのである。」

ですから神は必然的に善を行われるのです。絶対に罪を犯されはしません。また、誰かに強制されて善を行うのでもなく、誰かに止められているから罪を犯さないのでもないのです。神は自らがどこまでも善であられるために悪を遠ざけ、善を行われるのです。同じように悪魔は必然的に悪を行います。誰かに強制されてそれをするのではなく、自らの邪悪さのゆえに善を行おうとする余裕も力も彼の内にはないのです。自分の内にみなぎる悪のために悪魔は全力を使い、最善を尽くして悪を行おうとするのです。このようなことを必然的と言うのです。

第4節 人の理性と意思の改心はただ神の恵みによってなされる。

今度は神に選ばれた人たち、神の子供とされた者たちの内に起こる変化について考えてみることにしましょう。神の子供たちはどのように善を行うようになるのでしょうか？ま



ず神の子供たちは善を行うために救われたという事実を知る必要があります。「なぜなら、わたしたちは神に造られたものであり、しかも、神が前もって準備して下さった善い業のために、キリスト・イエスにおいて造られたからです。わたしたちは、その善い業を行って歩むのです」(エフェソ 2 : 10)。

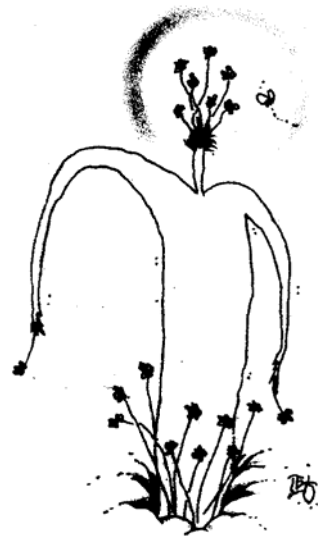
そしてその始まりは神の絶対的な恩寵によっているのです。「あなたがたの中で善い業を始められた方が、キリスト・イエスの日までに、その業を成し遂げてくださると、わたしは確信しています」(フィリピ 1 : 6)。この御言葉には同時にそのよき業を成し遂げられる方も神であられるという宣言が含まれています。信徒の内になされるよき業は何であってもみな神の恵みから始まり、神の恵みによってなされ、神の恵みによって成し遂げられるのです。

ですから私たちは神の恩寵と協力するのではないのです。神は私たちを手助けしようよとして来られたのではなく、私たちには無い全く新しいものを与えようよとして来られたのです。「わたしはお前たちに新しい心を与え、お前たちの中に新しい霊を置く。わたしはお前たちの体から石の心を取り除き、肉の心を与える。また、わたしの霊をお前たちの中に置き、わたしの掟に従って歩ませ、わたしの裁きを守り行わせる」(エゼキエル 36 : 26、27)。

ここで言われている私たちの「石の心」が生きるとすれば私たちも神と協力することができるかもしれません。しかし、神は私たちの弱った意志を助けるのではなく、私たちの心に新しい意思を作りあげてくださると言っているのです。神によって改造されない意思では善を行うことはできませんが、改造された後でも善を行うことができるのは神の恩寵によっているのです(エレミヤ 32 : 39 ~ 44)。ですから恩寵は常に意思よりも先行して働き、意思は恩寵の後に従うものだと言えるのです。

ソロモンも私たちの中で始められた神の恩寵が続けて働いてくださるようにと祈りましたし(列王上 8 : 58)、またダビデもそのように祈りました(詩 51 : 10)。イエスもぶどうの木と枝のたとえで同様なことを語っています(ヨハネ 15 : 5)。救われた者はその後、神の恩寵がなくてもよき実を自分で結ぶことができるという人は、ぶどうの幹無しに枝だけで太陽と酸素を受け取り、枝だけで実を結ぶことができるというのと同じような愚かなことを言っているのです。

神の恩寵によって私たちはまことのぶどうの木に接木されるだけでなく、その幹から送られる恩寵の樹液を味わい続け、それに養われて豊かな実を結ぶようにされます。ですから善を行おうと決心するのも、それを成し遂げ



ようと努力することもみな神から与えられるものなのです(コリント第一 12:6、ヨハネ 6:44、45)。神を信じて生きる聖徒は一日も欠かすことなく祈る必要があるのです。祈りを通して神の恩寵が自分に与えられるようにと慕い求めるのです(詩 119:133)。聖徒の意思が新たにされ、それが保たれるのも、また終わりまで堅く守られるのもただ神の恩寵によるのです。

墮落した本性はすべての人に共通していますが、恩寵はそうではありません(アウグスチヌス)。そしてその恩寵はよき業に対する報酬ではありません。また、最初は恩寵から始められますが、次に協力する関係に変わるのでもありません。私たちの持っている力が恩寵を賞金として受け取るようにさせたのでもありません。恩寵が私たちの力を作るのです。ですから恩寵がさらに大きな恩寵を生み出すのです。「だれでも持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる」(マタイ 25:29)という御言葉の意味するところがこのことを説明していると言えるのです。

パウロは自分の全生涯の働きがみな神の恵みであったと告白しました(コリント第一 15:10)。人間の意志は自由によって恩寵を受けるのではなく、恩寵によって自由を受けるのです。そして恩寵が与えられた喜びから不屈の力を受け、終わりまで堅持されるのです。

結びの言葉

生まれたままの人間の自由意志は悪を行う能力しか持っていません。ですからイエスは「ラザロよ、出てきなさい」(ヨハネ 11:43)と語られなければなりません。死んだ者には何もすることができないからです。墓の中で復活の奇跡を創造されたイエスの力が今日も私たちには必要なのです。イエスのその復活の恩寵が日ごとに私たちの意思を守り導いてくださることを祈りましょう。